

茨木市
男女共同参画に関する
市民意識調査報告書

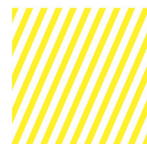
概要版

令和4年(2022年)3月



茨木市

次なる
茨木へ。



調査の概要

調査目的

第3次茨木市男女共同参画計画(令和5年度～9年度)の策定に向けて、男女共同参画にかかわる市民等の意識・実態を把握することを目的に実施しました。

調査概要と回収状況

	市民意識調査	小中学生アンケート調査	大学生意識調査
調査対象	・茨木市に居住する18歳以上の男女2,000人	・茨木市内の学校に通う小学5年生の男女369人 ・茨木市内の学校に通う中学3年生の男女431人	・市内の大学に通う学生
調査期間	令和3年10月20日～10月31日	令和3年10月15日～11月15日	令和3年10月20日～11月30日
調査方法	郵送による調査票の配布、郵送回収またはインターネット回答	学校を通じて直接配付・直接回収	学校を通じて調査協力依頼、インターネット回答
回収数(回収率)	1,153(57.7%)	小学生 360(97.6%) 中学生 399(92.6%)	302 ※自由回答形式のため回収率は算出できない

表記について

- 「n」は、集計対象数を示し、比率は「n」を100.0%としています。四捨五入の結果、合計が100%にならないことがあります。また、該当者の少ない分類項目は省略しているものがあります。
- 調査票の設問文や選択肢を省略して表記していることがあります。
- 前回調査とは、平成28年度に実施した「茨木市男女がともにつくるまちづくり市民意識調査」「茨木市男女がともにつくるまちづくりアンケート調査」(小学生・中学生)をさしています。

市民意識調査の結果

回答者の属性

- 性別は、「女性」が53.1%、「男性」が45.2%で、「女性」の割合が高くなっています。
- 年齢は、60歳以上の回答者が4割強を占めています。
- 家族構成は、「二世帯世帯(親と子)」が約5割を占め、次いで「一世帯世帯(夫婦またはパートナーと自分だけ)」が約3割、「ひとり世帯」が1割強となっています。
- 子どものいる人は、全体の約7割で、人数では、「2人」が約4割となっています。
- 就労形態を性別にみると、女性では、「家事専業(専業主婦・主夫)」の割合が最も高く、男性では、「勤め人(正規の社員や職員)」が最も高くなっています。

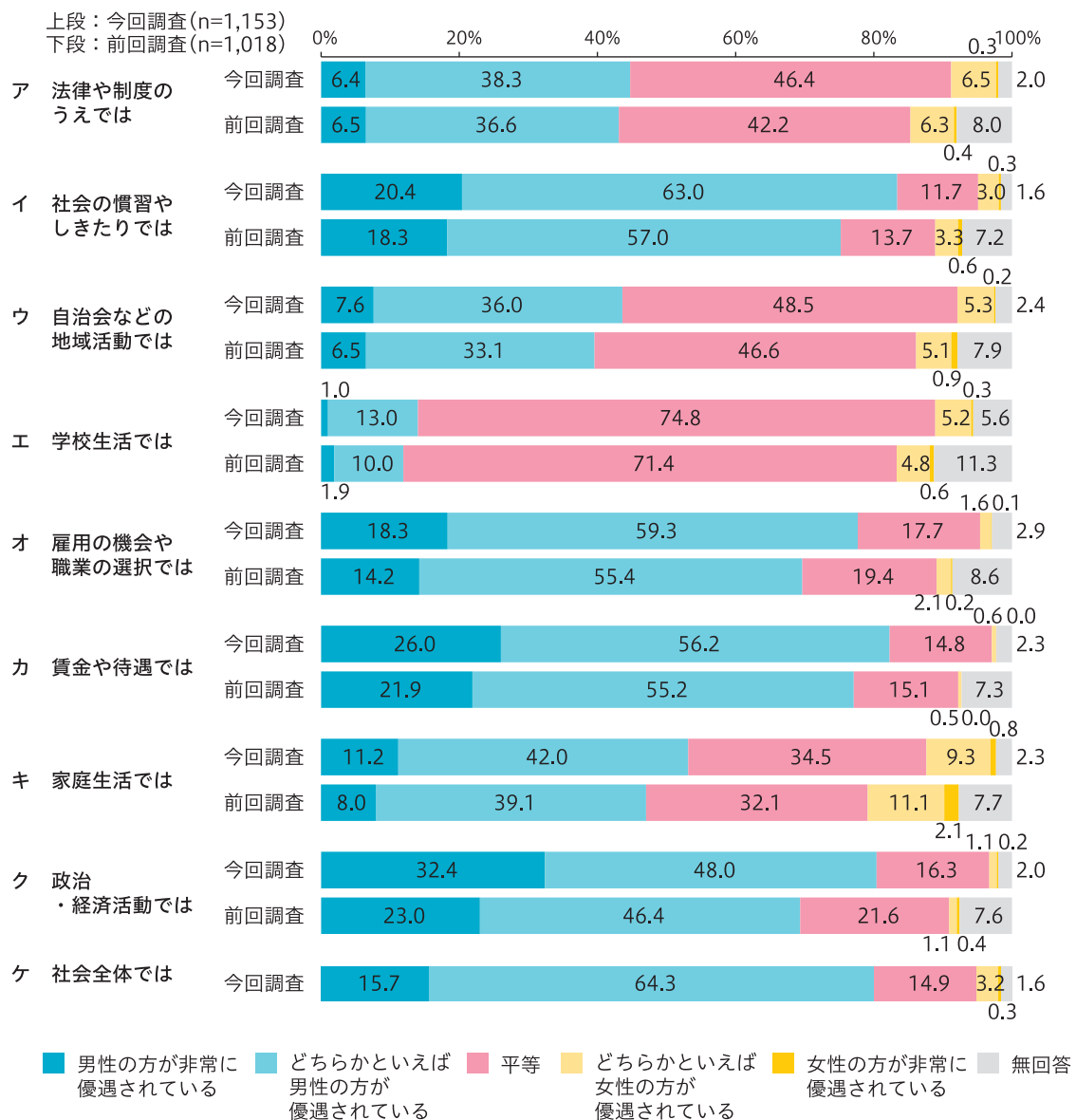
社会における男女の地位の平等感

社会における男性優遇感は高まっている傾向

社会の様々な分野における男女の地位については、「学校生活」は、平等と感じる人が約75%にのぼりますが、その他の分野では男性優遇と感じる人の割合が高く、なかでも「社会の慣習やしきたり」「雇用の機会や職業の選択」「賃金や待遇」「政治・経済活動」で特に高くなっています。それらの結果、「社会全体」では、80%が男性優遇と感じています。

前回調査結果と比べると、いずれの分野も今回調査の方が男性優遇と感じる割合が高くなっています。

図 男女の地位の平等感(前回調査との比較)





性別役割分担意識

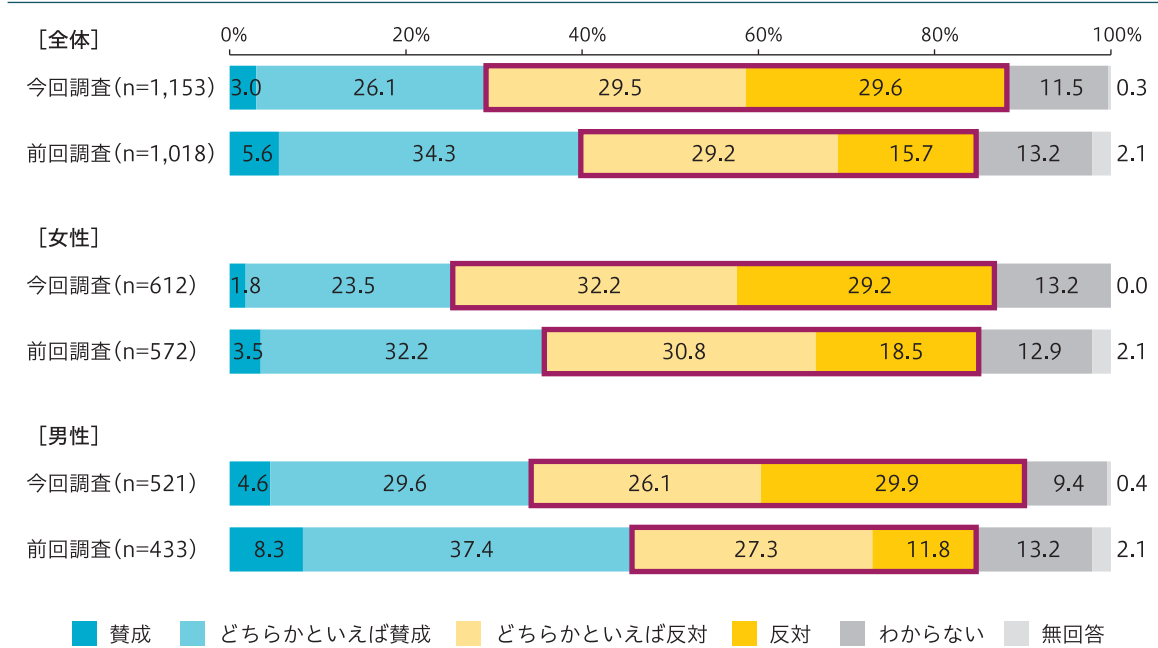
性別役割分担に反対の意識が高まり、特に男性の変化が顕著

「男は仕事、女は家庭」という考え方(性別役割分担意識)に反対する人は約6割で、賛成する人の約3割に比べて高くなっています。

前回調査結果と比べて、男女とも反対する人の割合が高くなっており、意識の変化がうかがえます。

反対する人の理由では、「固定的な役割分担意識を押し付けるべきではない」の割合が高く、賛成する人の理由では、「女性が仕事と家事・育児・介護を両立するのは大変だから」「女性が家庭にいる方が子どもの成長に良いから」が高くなっています。

図 性別 性別役割分担意識(前回調査との比較)



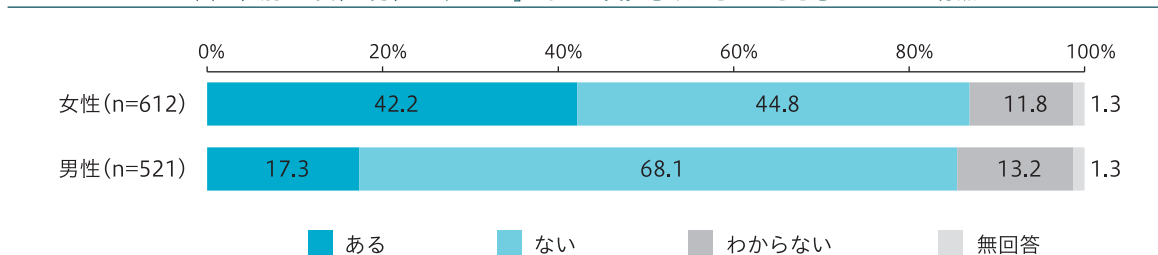
性別にかかわる生きづらさ

性別にかかわる負担感や生きづらさは女性の方がより強い傾向

「女性・男性であること」によって負担感や生きづらさを感じる人の割合は、女性は約4割で男性の倍以上の割合になっています。

負担感や生きづらさを感じることは、女性では「仕事と家事・育児・介護の両立の負担が大きい」「女性はやさしく、よく気がつくことを求められる」の割合が高く、男性では「仕事の責任が大きい」が高くなっています。

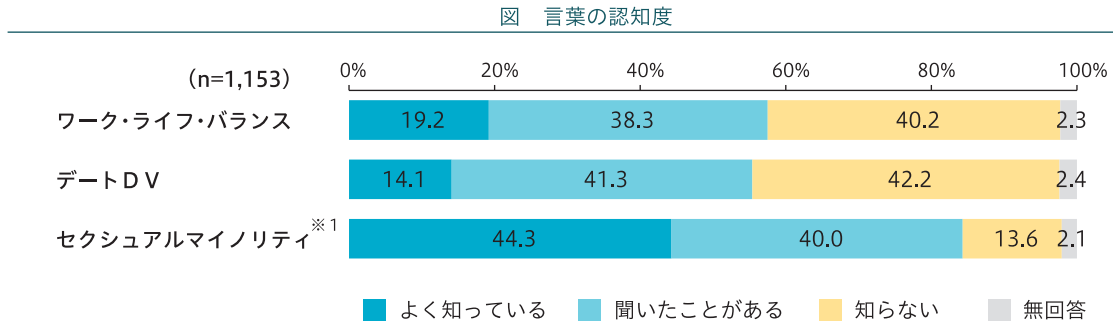
図 性別 「女性・男性であること」によって負担感や生きづらさを感じたことの有無



言葉の認知度

認知度が高い「セクシュアルマイノリティ」

「ワーク・ライフ・バランス」「デートDV」「セクシュアルマイノリティ」の認知度は、「セクシュアルマイノリティ」が8割以上と高くなっています。



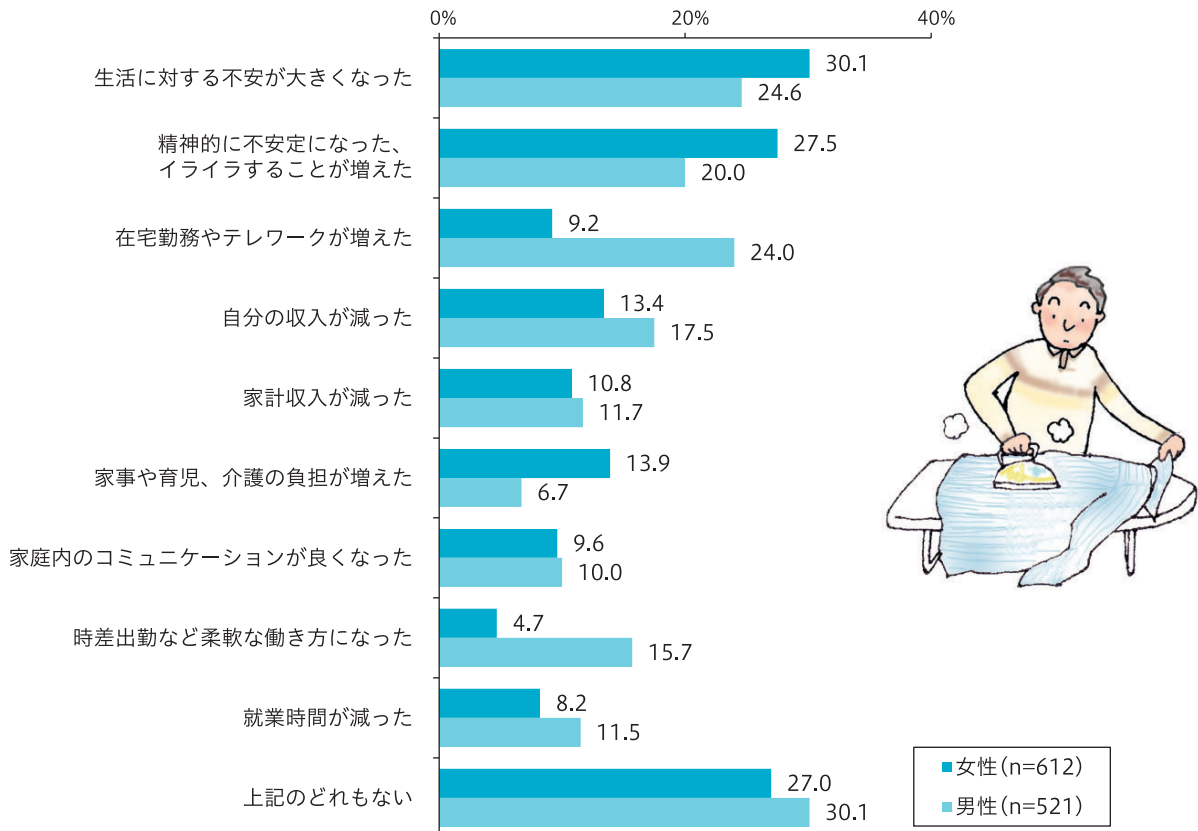
※1 「セクシュアルマイノリティ」の選択肢は「言葉も意味も両方知っている」「言葉だけは知っている」「言葉も知らない」

新型コロナウイルス感染症の影響

女性は不安や負担の増大、男性は仕事の変化

新型コロナウイルス感染症の生活への影響をみると、女性は「生活に対する不安」「精神的に不安定になった」「家事や育児等の負担が増えた」の割合が男性に比べて高く、男性は「在宅勤務やテレワークが増えた」「収入が減った」「時差出勤など柔軟な働き方」など仕事上の変化の割合が高くなっています。

図 性別 新型コロナウイルス感染症の影響があった主な項目



生活の中で優先したいこと・していること

仕事・家庭・個人の生活を3つとも大切にしたい人が増加

生活の中で優先したいことを、前回調査と比較すると、男女とも「『仕事』と『家庭や地域活動』と『個人の生活』の3つとも大切にしたい」の回答が高くなっています。

また、現実でもこれら3つとも大切にしている人の割合が高くなっています。

図 性別 生活の中で優先したいこと(前回調査との比較)

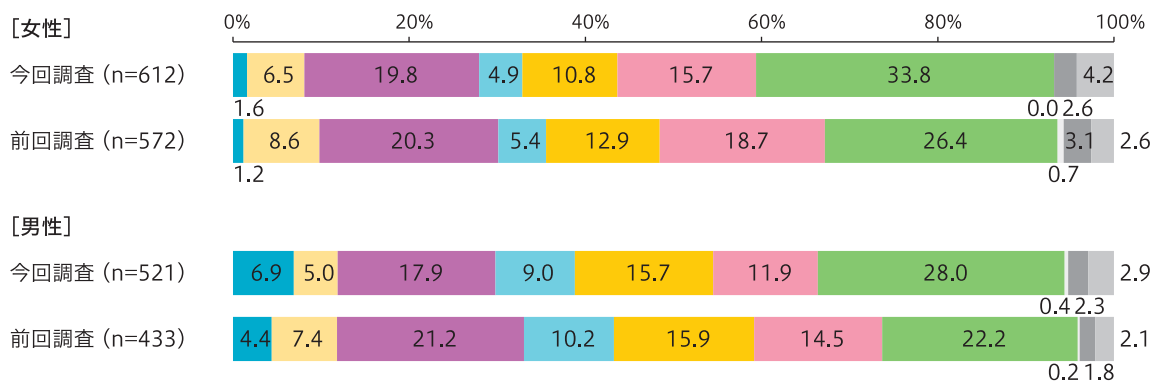
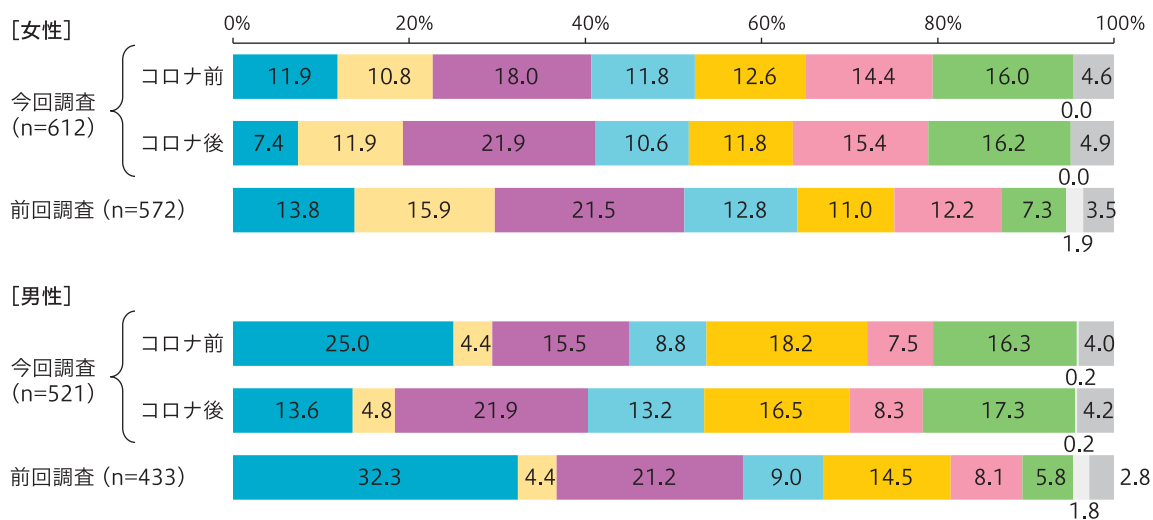
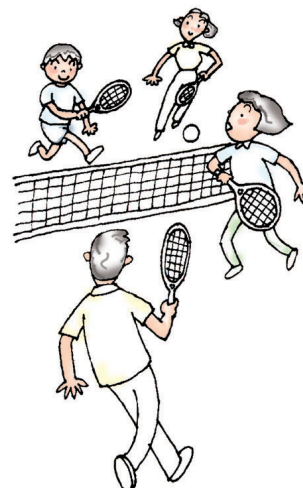


図 性別 生活の中で優先していること(前回調査との比較)



- 「仕事」を優先
- 「家庭や地域活動」を優先
- 「個人の生活」を優先
- 「仕事」と「家庭や地域活動」を優先
- 「仕事」と「個人の生活」を優先
- 「家庭や地域活動」と「個人の生活」を優先
- 「仕事」と「家庭や地域活動」と「個人の生活」の3つとも大切
- その他
- わからない(優先したいことのみ)
- 無回答



女性の就労と結婚、出産、子育てとのかかわり方の考えと実際

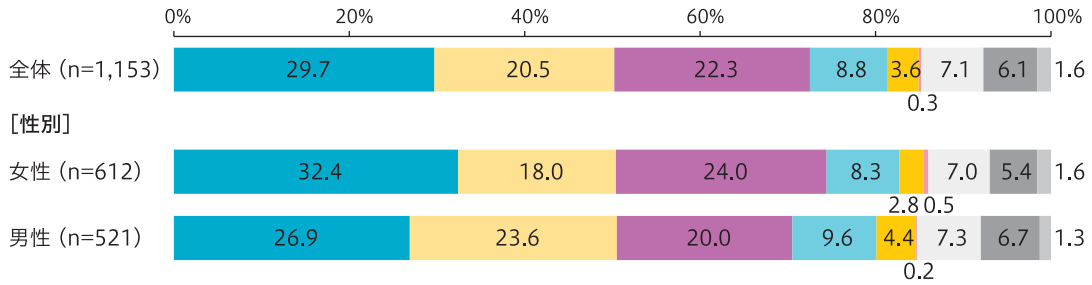


女性の就労は、子育ての時期に一時やめ再就職するパターンが多い

女性の就労と結婚、出産、子育てとのかかわり方についての考えは、結婚、出産にかかわらず就労継続が約3割で、子育ての時期だけ一時やめ、その後はパートタイムまたはフルタイムで仕事を続けるのが良いという回答が合わせて4割強となっています。

一方で、実際にはどうしたか(どうしたいか)については、結婚後は家庭に専念の割合が高くなっており、良いと思う女性の働き方と実際にはギャップが生じています。

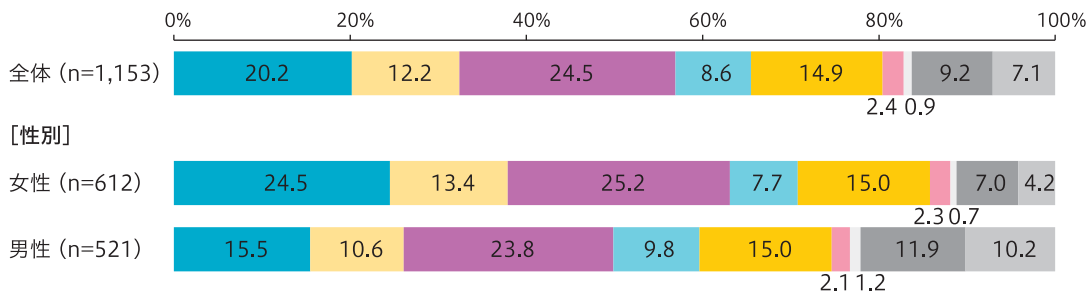
図 性別 女性の就労と結婚、出産、子育てとのかかわり方についての考え



- 結婚、出産にかかわらず、仕事を続ける方が良い
- 子育ての時期だけ一時やめ、その後はフルタイムで仕事を続けるのが良い
- 子育ての時期だけ一時やめ、その後はパートタイムで仕事を続けるのが良い
- 子どもができるまで仕事に就き、子どもができたなら家事や子育てに専念するのが良い
- 結婚までは仕事に就き、結婚後は家庭のことに専念するのが良い
- 女性は仕事に就かない方が良い
- その他
- わからない
- 無回答



図 性別 女性の就労と結婚、出産、子育てとのかかわり方についての実際



- 結婚、出産にかかわらず、仕事を続けている(続けていた/続けるつもり)
- 子育ての時期だけ一時やめ、その後はフルタイムで仕事を続けている(続けていた/続けるつもり)
- 子育ての時期だけ一時やめ、その後はパートタイムで仕事を続けている(続けていた/続けるつもり)
- 子どもができるまで仕事に就き、子どもができたなら家事や子育てに専念している(専念していた/専念するつもり)
- 結婚までは仕事に就き、結婚後は家庭のことに専念している(専念していた/専念するつもり)
- 仕事に就いたことはない(就くつもりはない)
- その他
- わからない
- 無回答

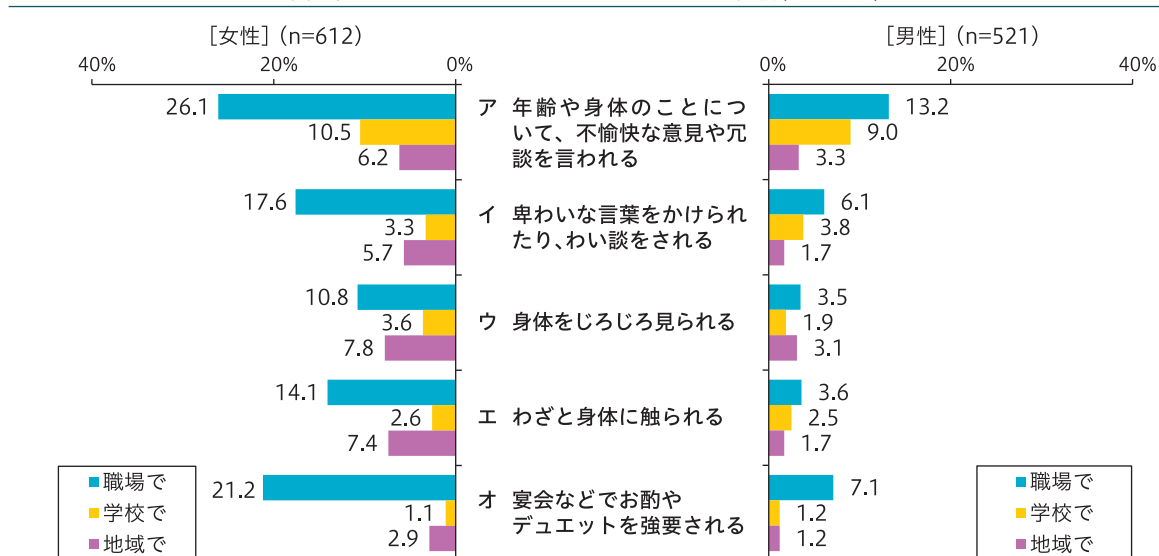
セクシュアル・ハラスメント、DVについて



女性に多いセクシュアル・ハラスメントを受けた経験

セクシュアル・ハラスメントを受けた経験は、男女とも職場での経験が多く、男性に比べて女性の経験割合が高くなっています。

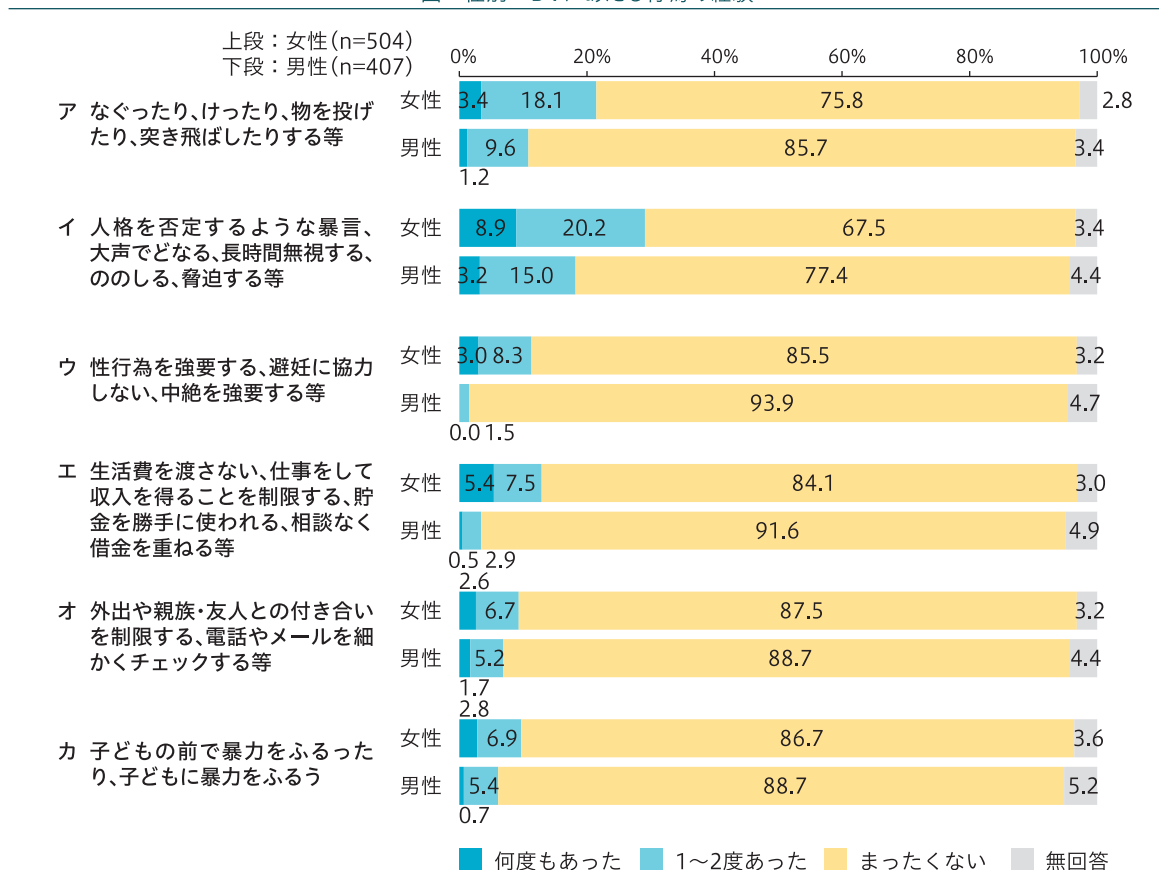
図 性別 セクシュアル・ハラスメントを受けた経験(主な項目)



DVにあたる行為の経験も女性が多い

配偶者・パートナーがいた(いる)人のDVにあたる行為の経験では、いずれの項目とも女性の方が経験のある割合が高くなっています。暴言や長時間の無視は、男性の経験も2割近くになっています。

図 性別 DVにあたる行為の経験



セクシュアルマイノリティについて

30歳代以下では、20人に1人が性自認・性的指向で悩んだ経験がある

性自認・性的指向で悩んだことのある人は、全体で2.4% (28人) となっています。30歳代以下で割合がやや高くなっています。

全体の4人に3人は、セクシュアルマイノリティにとって生活しづらい社会だと感じており、その理由としては、「カミングアウト後、周囲の理解が得られない」「自認する性として利用できる施設・設備が少ない」「法整備が進んでいない」「いじめを受ける」などが上位に挙げられています。

図 年齢別 性自認・性的指向で悩んだことの有無

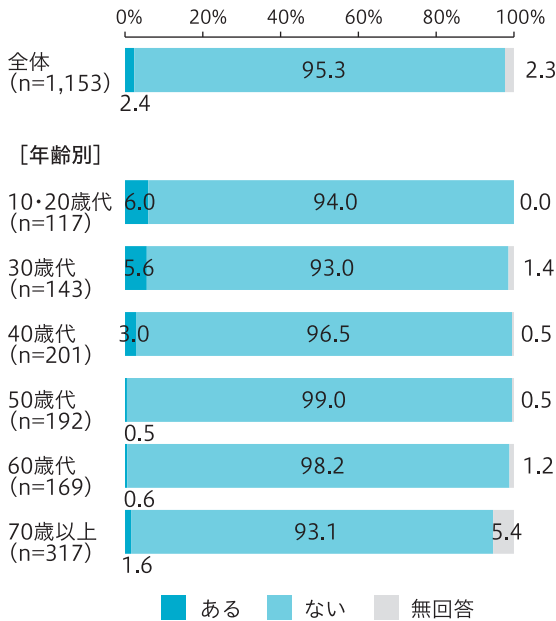
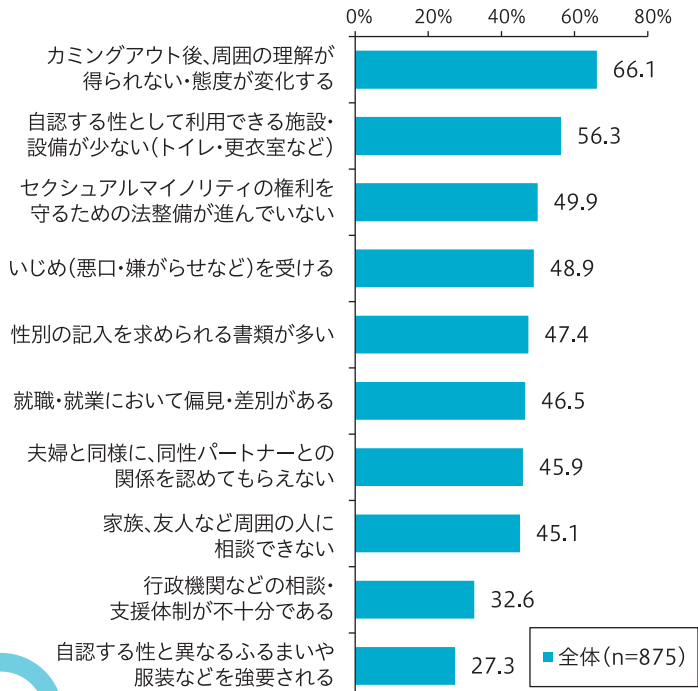


図 セクシュアルマイノリティが生活しづらい社会である理由(主な回答)



茨木市では、セクシュアルマイノリティ当事者支援のために「いばらきにじいろ相談(電話相談)」「いばらきにじいろスペース(コミュニティスペース)」を実施しています。

2021.7 START

いばらきにじいろ相談

自分の性別ってなんだろう? / セクシュアルマイノリティだって打ち明けられた、どうしたらいい? / 異性を好きって前嫌で話されてしんどい / ゲイだって「うわご」を流されて困ってる / 子どもが制服のことで悩んでどう接したら...?

LGBTQ当事者、その家族、学校や職場の関係者、支援者からのご相談を、専門の相談員がお受けします。

毎月第4土曜日 15時~20時
080-2395-3015 受付は19:45まで

ひみつは守られます / 名乗らなくて大丈夫です

LGBTQって? / スェイク / トランスジェンダー / クィア・クエスチョニングなど

茨木市 市民文化部 人権・男女共生課
月~金 8:45 ~ 17:15 (祝日・年末年始除く)
072-620-1640 | jinken@city.ibaraki.lg.jp

2021.7 はじまるよ!

いばらきにじいろスペース

茨木市がセクシュアリティのことを気軽に話せるスペースを開始します

なんで(仮)なの? / どんな話をするの? / どんな人がいるの?

2021-2022 開催予定日 全日18時~20時 開催場所 ローズWAM

住所: 茨木市元町4番7号 電話: 072-620-9920

茨木市立男女共生センター

2021-2022 開催予定日: 7/30, 8/25, 9/22, 10/10, 11/21, 12/17, 1/14, 2/23, 3/10

茨木市 市民文化部 人権・男女共生課 月~金 8:45 ~ 17:15 (祝日・年末年始除く)
072-620-1640 | jinken@city.ibaraki.lg.jp

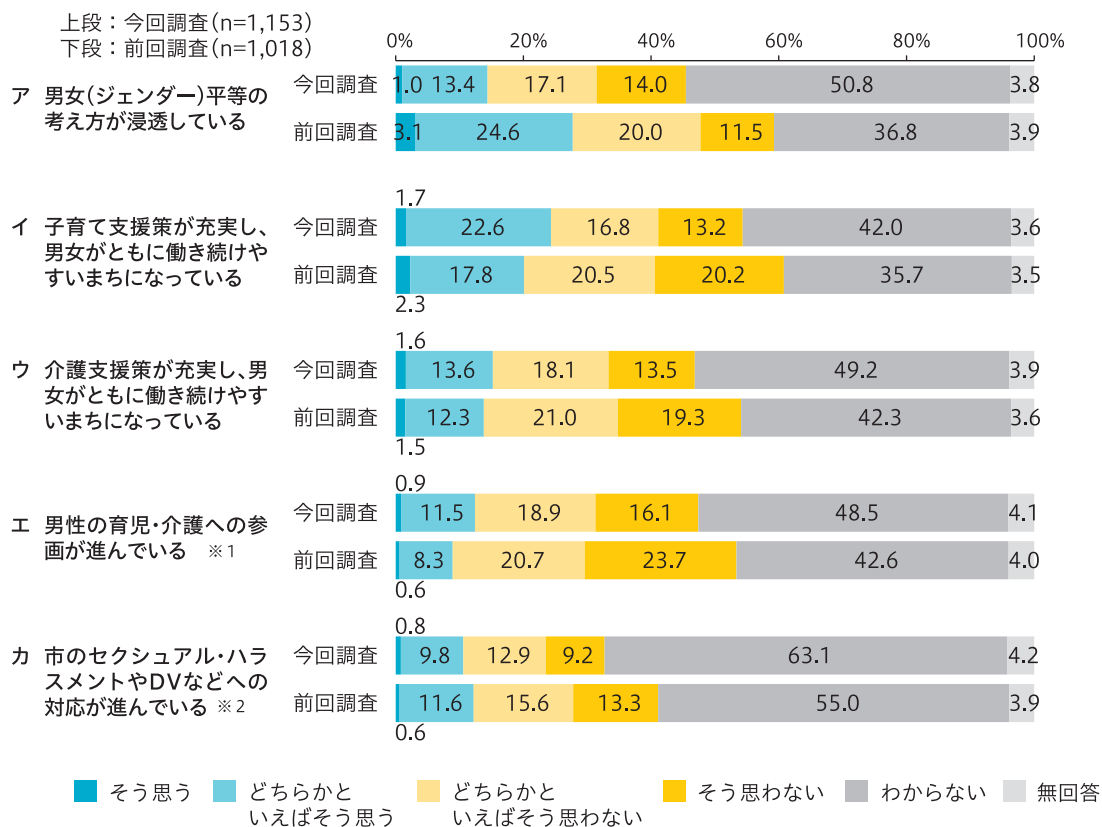
※実施日時や電話相談の番号は令和4年4月から変わります。最新の情報は、茨木市ホームページをご覧ください。人権・男女共生課にお問い合わせください。



子育てや介護の支援が前回より評価されている

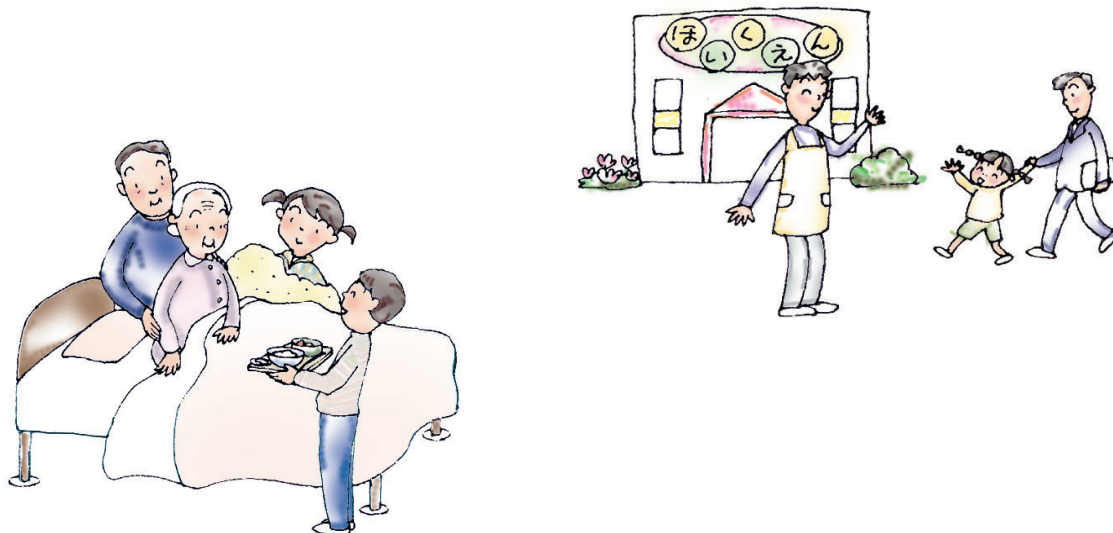
前回調査と比較すると、子育て支援や介護支援が充実し、男女がともに働き続けやすいまちになっているという評価が高まっている一方で、「男女(ジェンダー)平等の考え方が浸透している」の評価は前回に比べて低くなっています。

図 男女共同参画の進展に関する認識(前回調査との比較)



※1 前回調査では「男性の子育て・介護への参画が進んでいる」

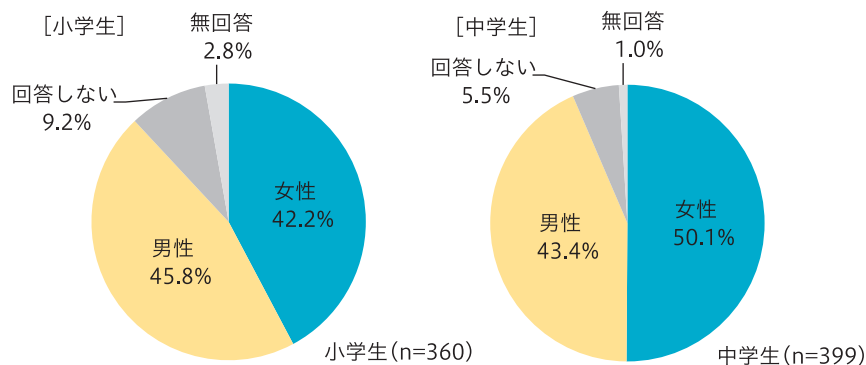
※2 前回調査では「市のセクシュアル・ハラスメントやDVなど女性に対する暴力への対応が進んでいる」



小中学生アンケート調査の結果

回答者の属性

- 性別を「回答しない」とした回答は、小学生では9.2%、中学生では5.5%で、一般市民や大学生と比べて高い傾向です。



男女共同参画に関する意識について

家庭の仕事の役割分担にみられる意識の変化

前回調査と比較すると、小学生・中学生とも、すべての項目で「いっしょに生活している人が協力するのがよい」の割合が高くなっており、特に「生活費をかせぐ仕事」に関する意識の変化が顕著にみられます。

図 家庭の仕事の役割分担(小学生 前回調査との比較)

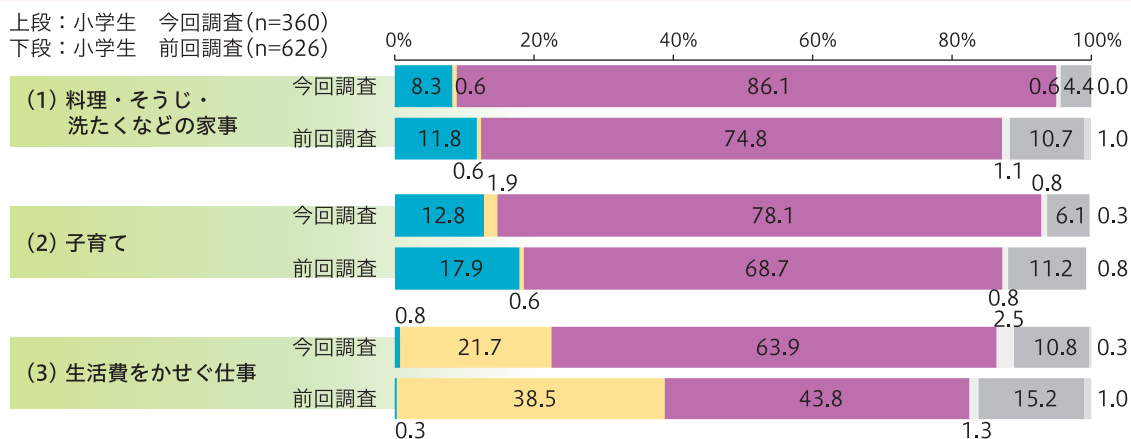
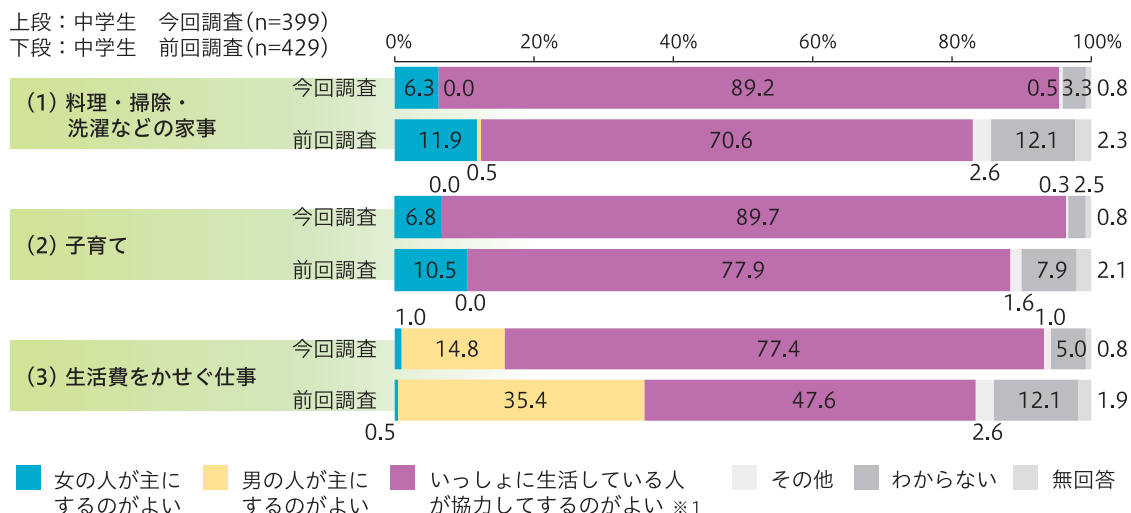


図 家庭の仕事の役割分担(中学生 前回調査との比較)



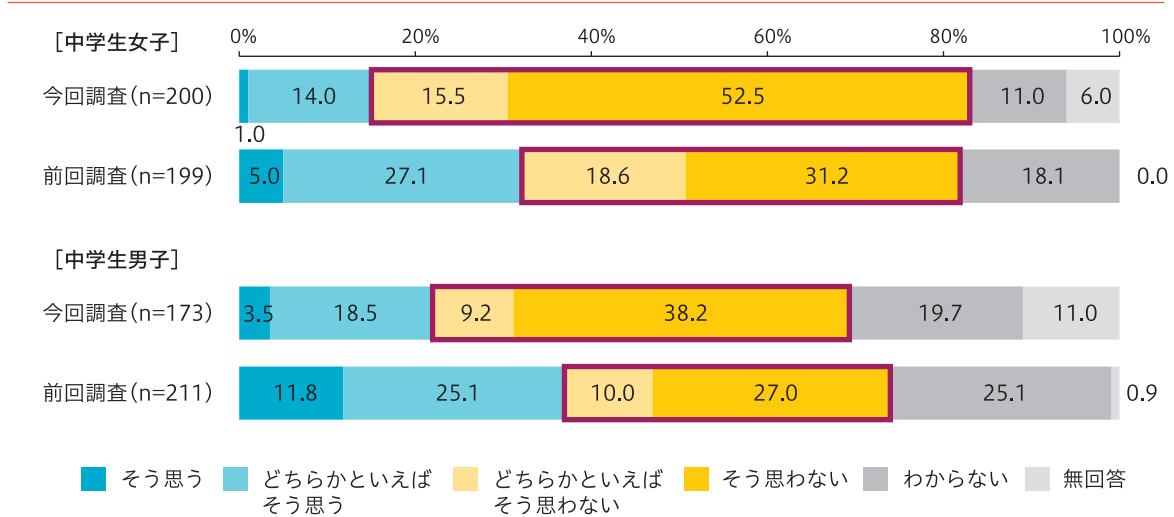
※1 前回調査では「家族で協力してするのがよい」

性別役割分担意識

中学生の性別役割分担意識は女子の変化が大きい

「家庭の外の仕事は男性、家庭の中の仕事は女性」という考え方(性別役割分担意識)に対して、男女とも賛成する割合が低下し、反対する割合が高くなっています。特に女子の変化が大きい傾向です。

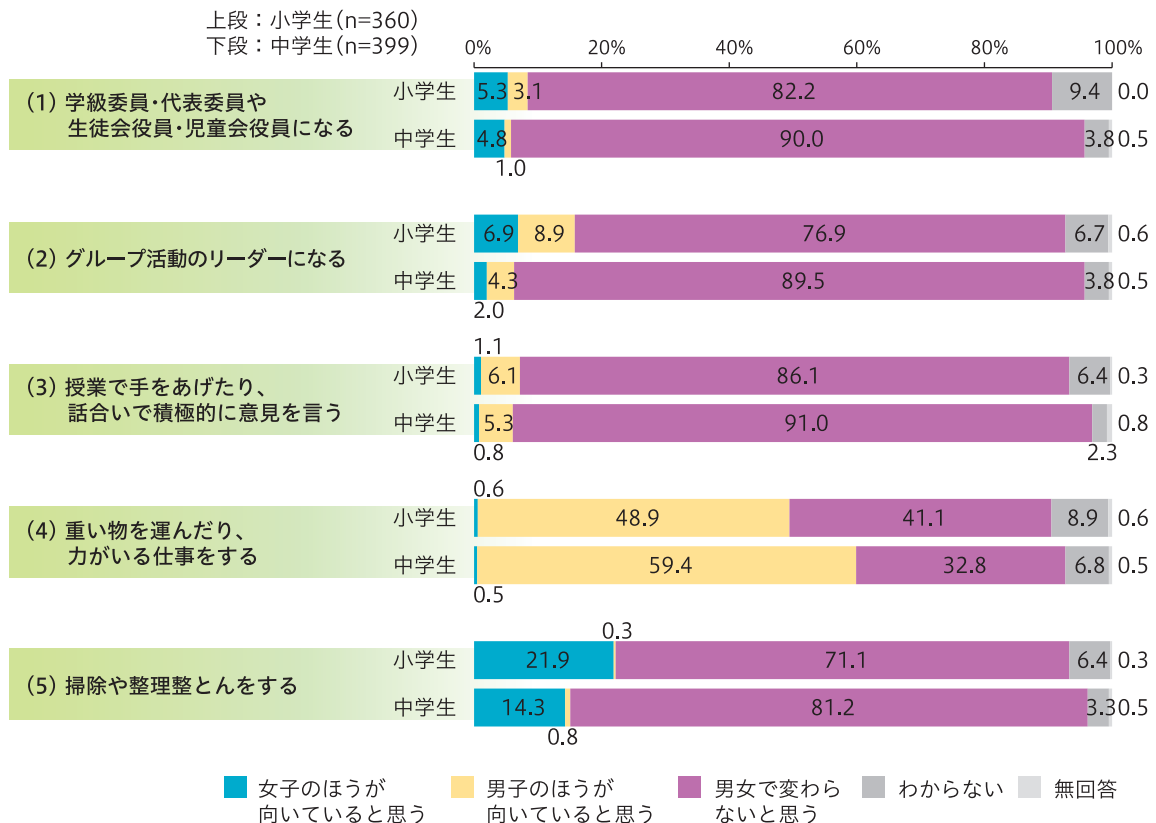
図 性別 性別役割分担意識(前回調査との比較)



学校生活でも一部にみられる性別役割分担意識

学校生活での役割分担では、「重い物を運んだり、力がある仕事をする」に向いているのは男子、「掃除や整理整とんをする」に向いているのが女子の回答が他の項目に比べて高くなっています。

図 学校生活における役割分担

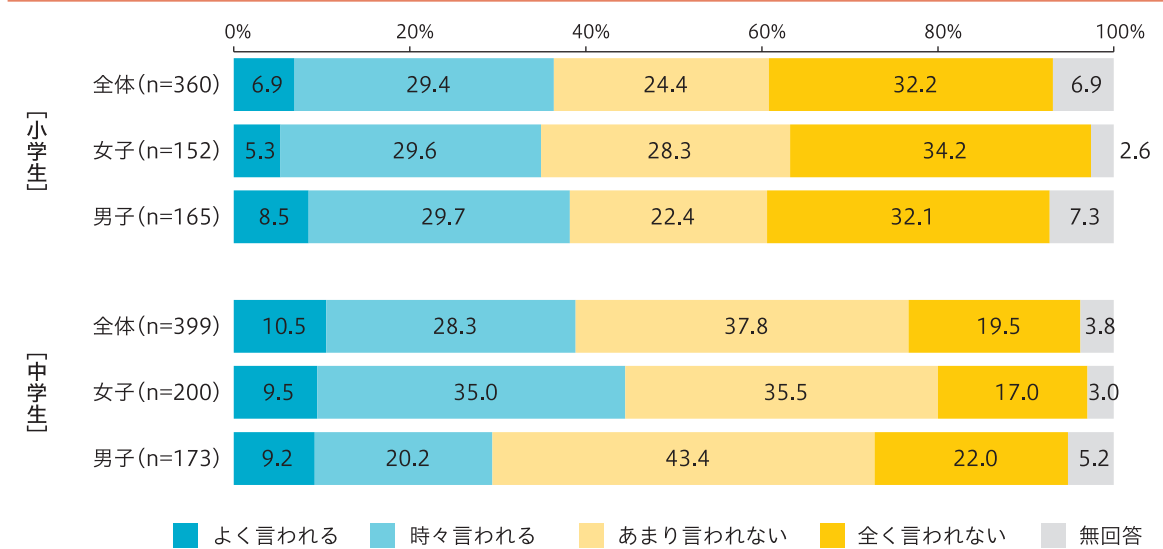


「男だから○○」や「女だから○○」と言われたこと

3人に1人は「男だから○○」や「女だから○○」と言われた経験あり

小学生・中学生とも、「男だから○○」や「女だから○○」と言われた経験が3人に1人はあると回答しています。小学生では男女の違いはほとんどありませんが、中学生では、男子に比べて女子の方が言われた経験が高くなっています。

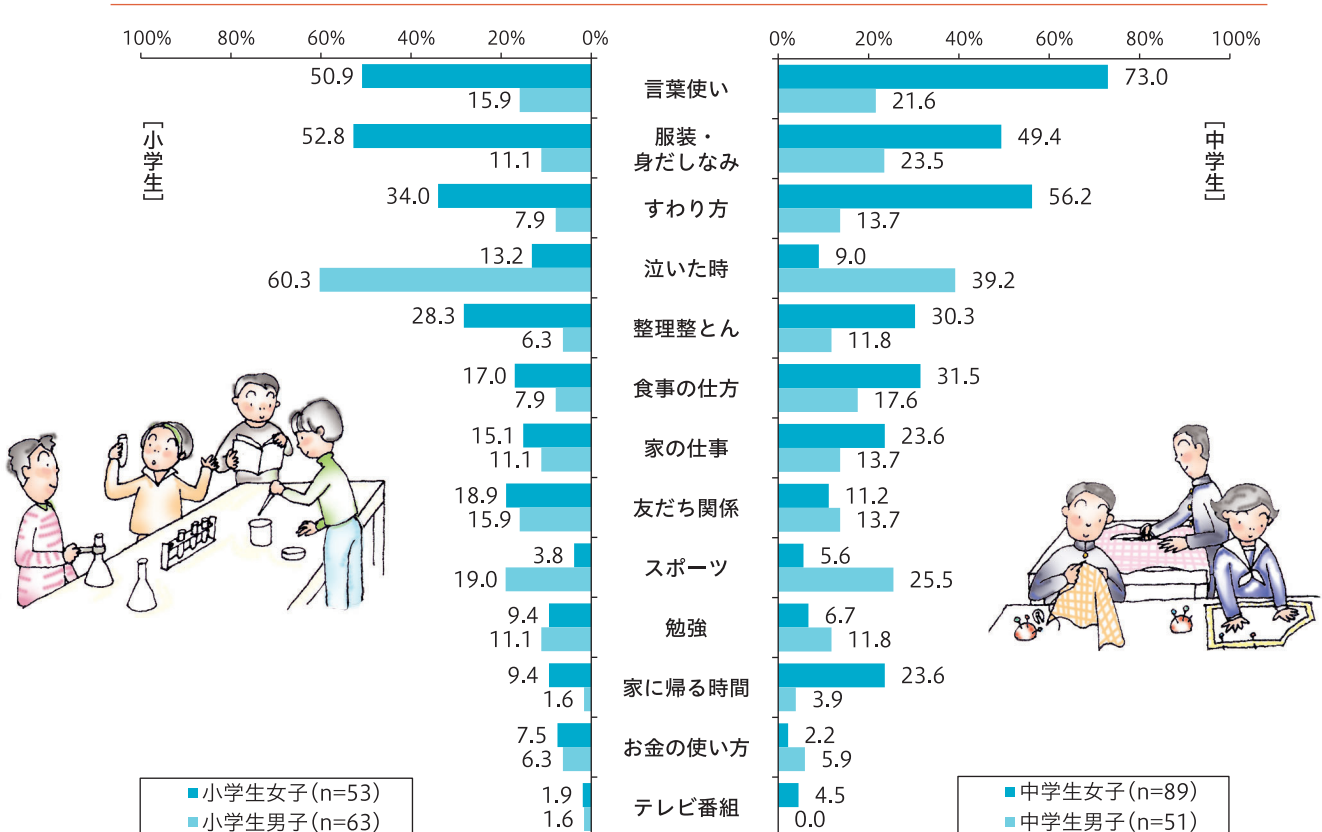
図 性別 「男だから○○」や「女だから○○」と言われた経験の有無



「男だから○○」や「女だから○○」と言われた原因

「男だから○○」や「女だから○○」と言われた原因は、小学生・中学生ともに女子では「言葉使い」「服装・身だしなみ」「すわり方」が高く、男子では「泣いた時」の割合が高くなっています。男女で違いが大きくなっています。

図 性別 「男だから○○」や「女だから○○」と言われた原因

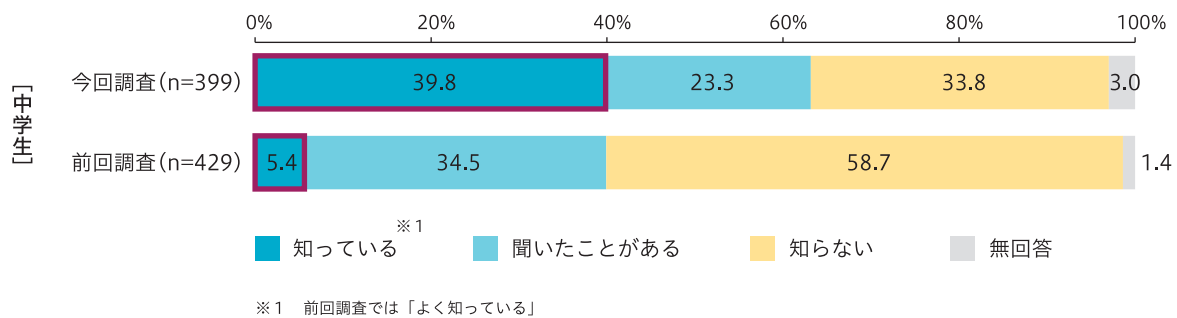


デートDVについて

「デートDV」の認知度は大幅に上昇

「デートDV」という言葉の認知度は、前回調査と比べて、「知っている」の割合が大きく上昇しています。これまでのデートDV予防教育の効果が現れていると考えられます。

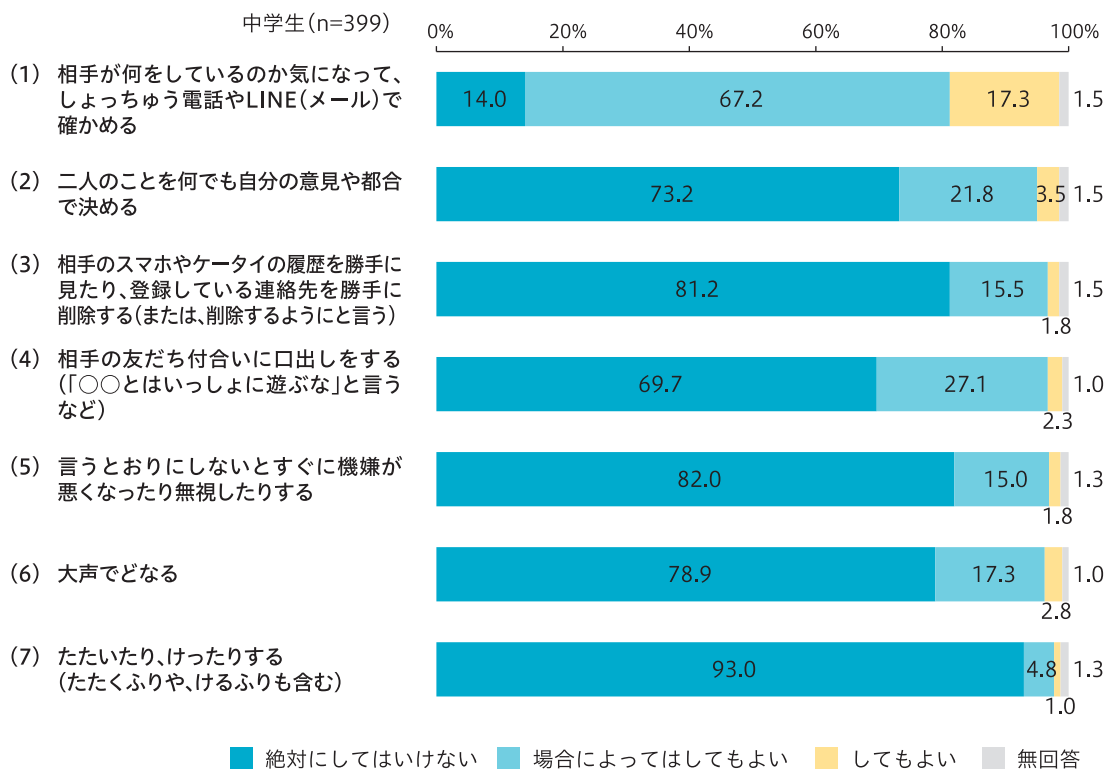
図 「デートDV」の認知度(前回調査との比較)



交際相手に対するひんぱんな電話やLINEに対しては容認する傾向

デートDVにあたる行為に対する意識では、「相手が何をしているのか気になって、しょっちゅう電話やLINE(メール)で確かめる」については、「場合によってはしてもよい」と「してもよい」を合わせて約85%で、他の項目との意識の差が大きくなっています。

図 交際関係について変だと思うこと

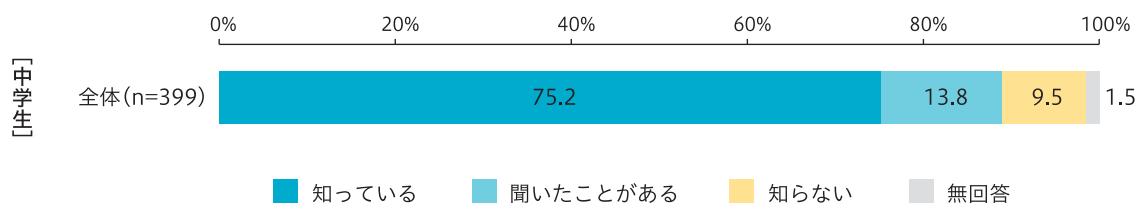


セクシュアルマイノリティについて

セクシュアルマイノリティの認知度は9割と高い

「セクシュアルマイノリティ(LGBTQなど)」という言葉の認知度は、「知っている」が約75%、「聞いたことがある」と合わせると約9割で、一般市民と比べて高い認知度となっています。

図 セクシュアルマイノリティの認知度

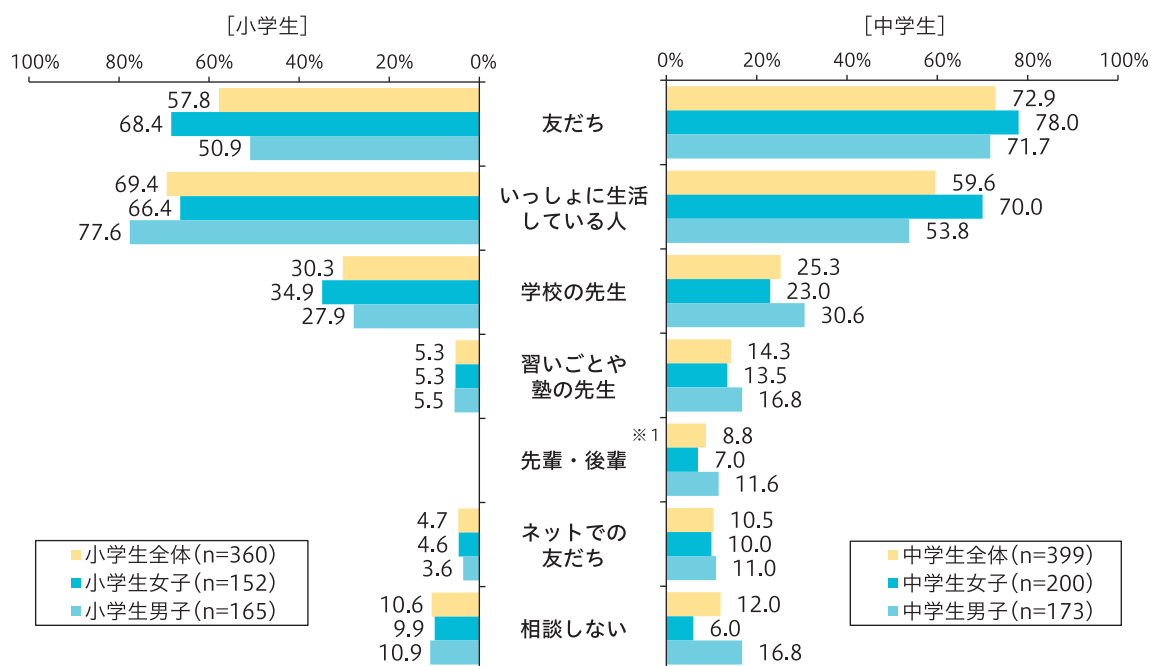


悩みごとの相談状況

相談相手は家族か友だち

悩みごとや心配ごとを相談できる人についてたずねたところ、小学生・中学生ともに「友だち」「いっしょに生活している人」の割合が高くなっています。小学生に比べて中学生では、「友だち」が高い傾向です。また、中学生では「ネットでの友だち」をあげた割合が約1割となっています。

図 性別 悩みごとや心配ごとがある時の相談相手



※1 「先輩・後輩」は中学生調査のみの項目

大学生意識調査の結果

回答者の属性

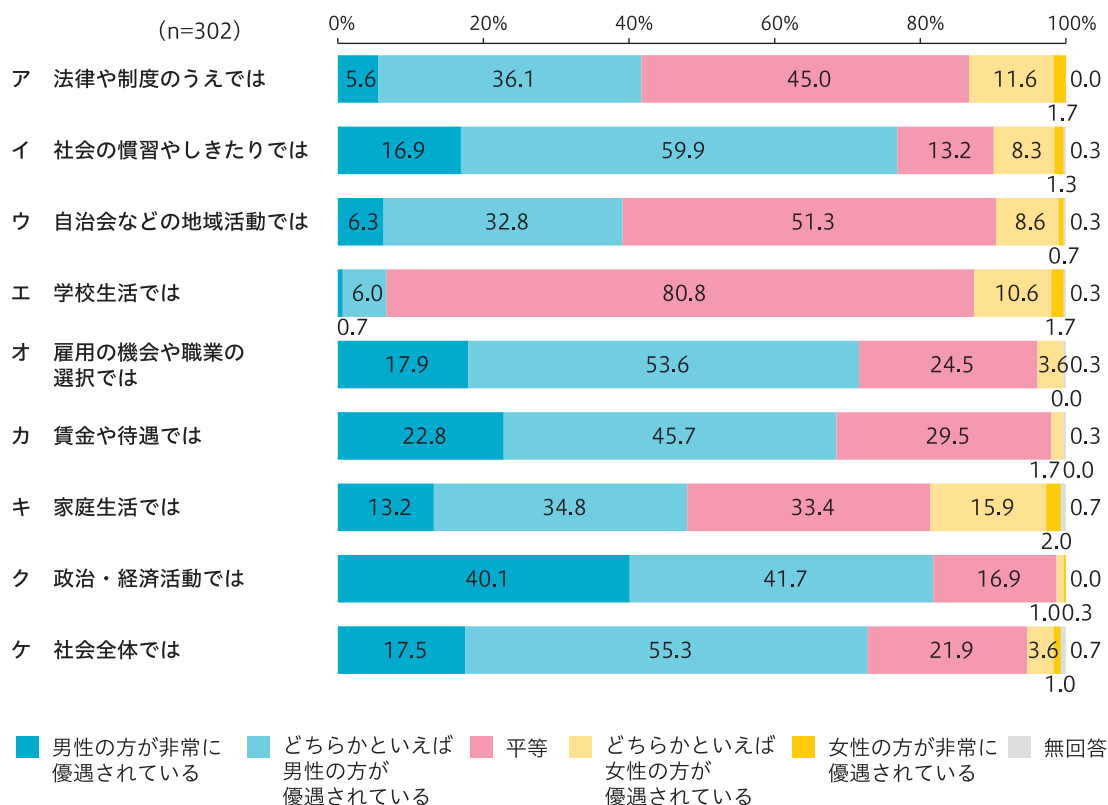
- 性別は「女性」が64.2%、「男性」が32.5%、「その他」が3.3%で「女性」の割合が高くなっています。
- 年齢は、「19歳」「20歳」「21歳」が約2割ずつで「18歳」「22歳」が約1割程度となっています。

社会における男女の地位の平等感

多くの分野で男性優遇と感じる割合は高い

社会の様々な分野における男女の地位については、「学校生活」は平等と感じる人がほとんどを占めるものの、その他の分野では男性優遇と感じる人の割合が高く、なかでも「社会の慣習やしきたり」「雇用の機会や職業の選択」「賃金や待遇」「政治・経済活動」で特に高くなっている傾向は、一般市民と同様です。

図 男女の地位の平等感





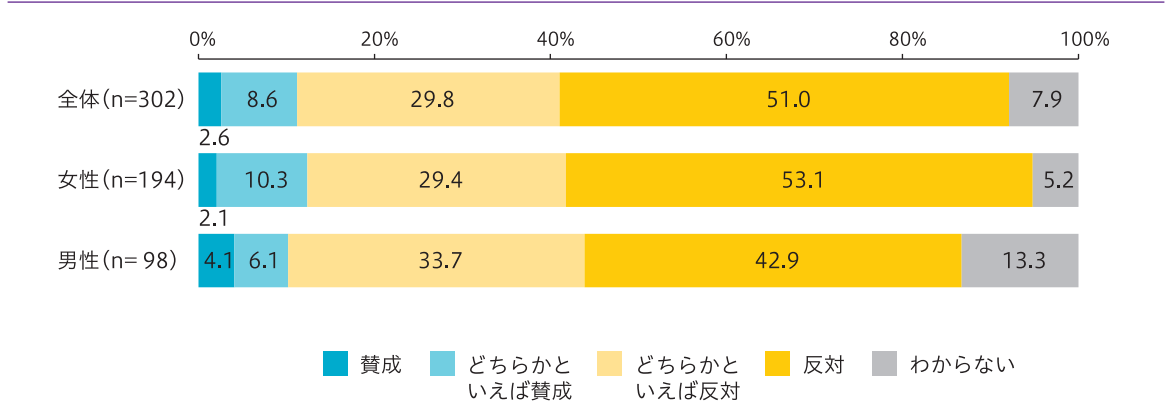
性別役割分担意識

性別役割分担意識には反対が大半を占める

「男は仕事、女は家庭」という考え方(性別役割分担意識)に賛成する人の割合は約1割で、反対する人が約8割を占めています。

反対する人の理由では、「固定的な役割分担意識を押し付けるべきではない」が高く、賛成する人の理由では、「女性が仕事と家事・育児・介護を両立するのは大変だから」「女性が家庭にいる方が子どもの成長に良いから」が高くなっているのは、一般市民と同様の傾向です。

図 性別 性別役割分担意識

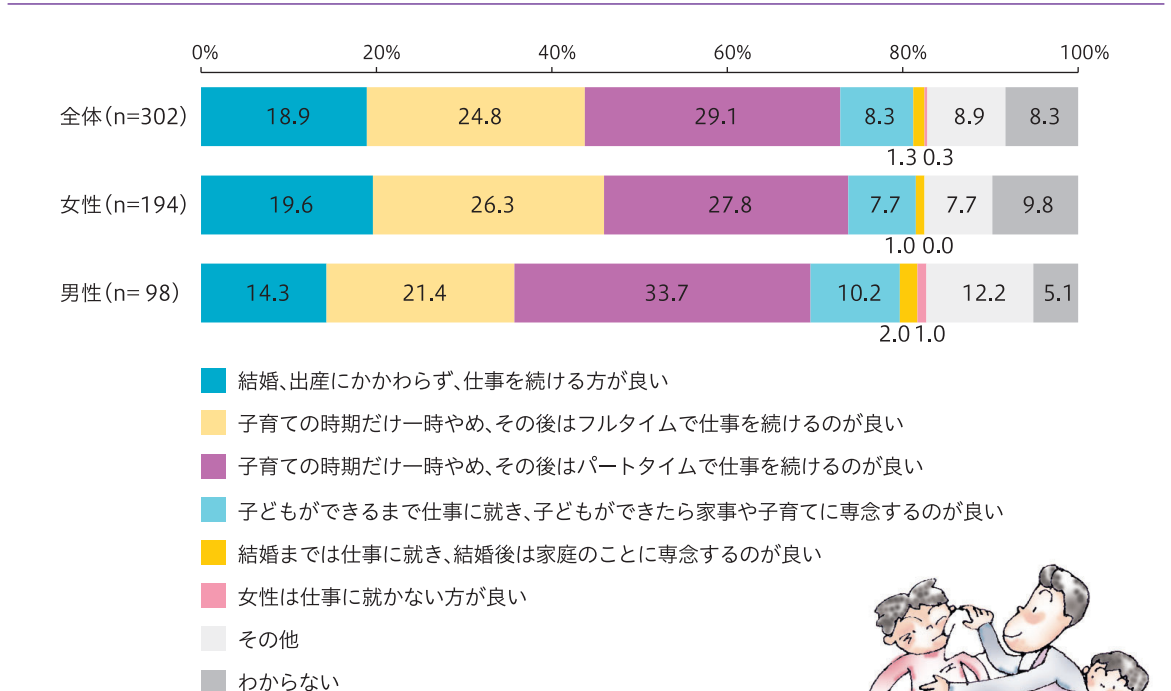


女性の就労と結婚、出産、子育てとのかかわり方の考え

女性の就労は、子育ての時期に一時やめ再就職するパターンが半数以上

女性の就労と結婚、出産、子育てとのかかわり方についての考えは、子育ての時期だけ一時やめ、その後はパートタイムまたはフルタイムで仕事を続けるのが良いという回答が半数を超えています。

図 性別 女性の就労と結婚、出産、子育てとのかかわり方についての考え

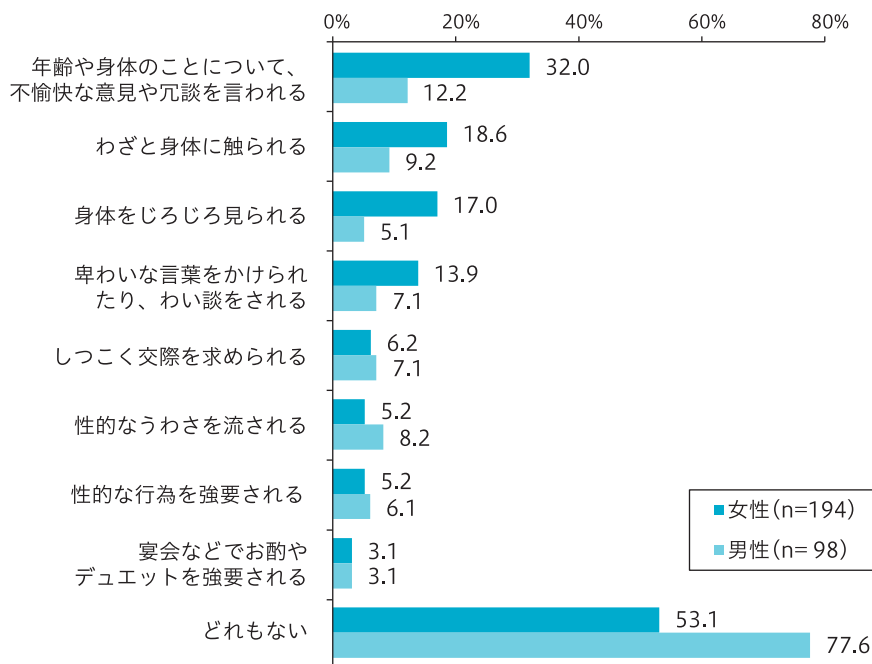


セクシュアル・ハラスメント、デートDVについて

セクシュアル・ハラスメントを受けた経験は女性の方が多いものの、男性の被害もみられる

「年齢や身体のことについて、不愉快な意見や冗談を言われる」「わざと身体に触られる」「身体をじろじろ見られる」「卑わいな言葉をかけられたり、わい談をされる」で女性の回答割合が高いものの、「性的なうわさを流される」「しつこく交際を求められる」など男性の方が高い項目もみられます。

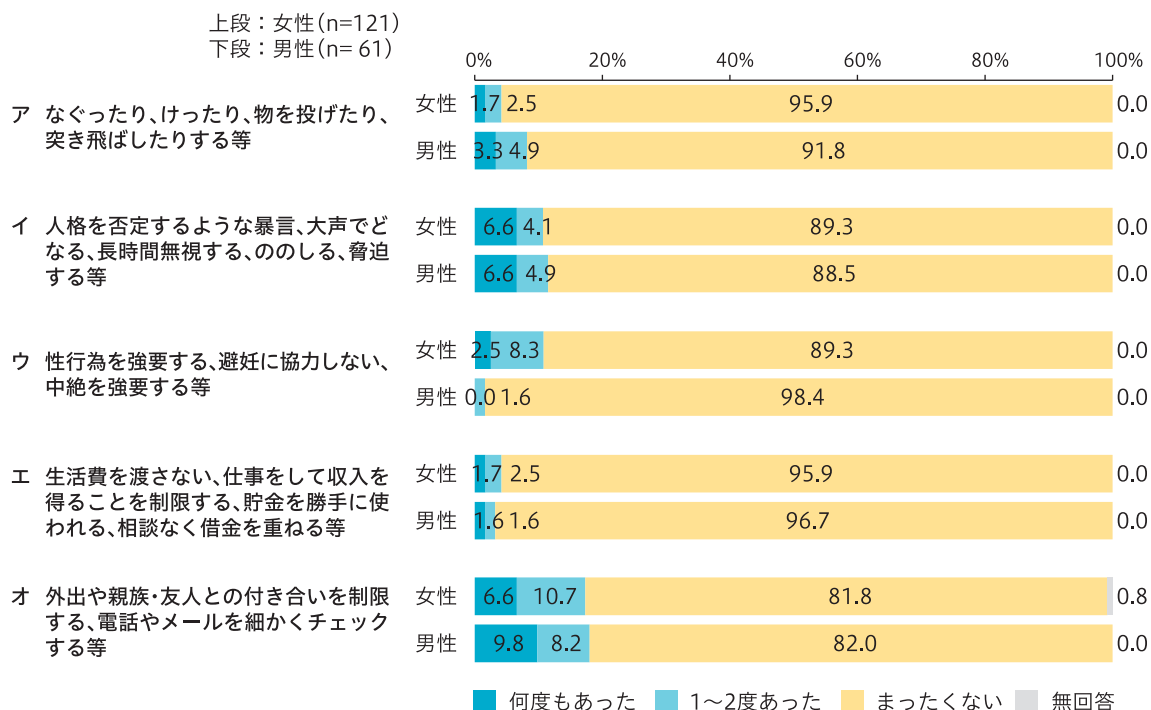
図 性別 セクシュアル・ハラスメントを受けた経験



デートDVにあたる行為の経験で性暴力被害は女性が多いが、そのほかは男女で変わらない

交際相手のいた(いる)人に、デートDVにあたる行為の経験をたずねたところ、性暴力被害の割合は女性が高いものの、そのほかの行為では男性の回答が高いものもみられます。

図 性別 交際相手からの暴力の有無



セクシュアルマイノリティについて

セクシュアルマイノリティの認知度は極めて高い

セクシュアルマイノリティの認知度は、「言葉も意味も両方知っている」が8割近くを占めて、「言葉だけは知っている」と合わせると、ほぼ全員が知っています。

性自認・性的指向で悩んだことのある人は約2割

性自認・性的指向で悩んだことのある人は約2割で、一般市民の10・20歳代よりも高い傾向です。

図 セクシュアルマイノリティの認知度

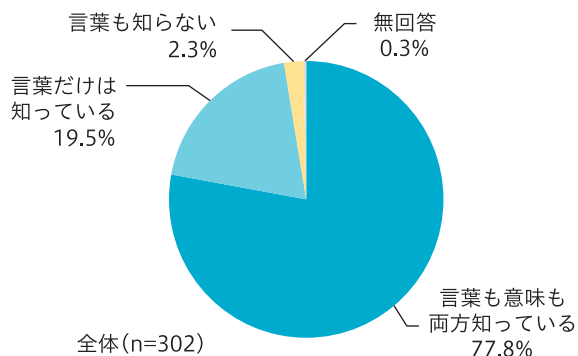
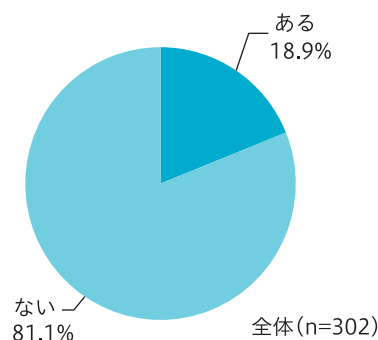


図 性自認・性的指向で悩んだことの有無

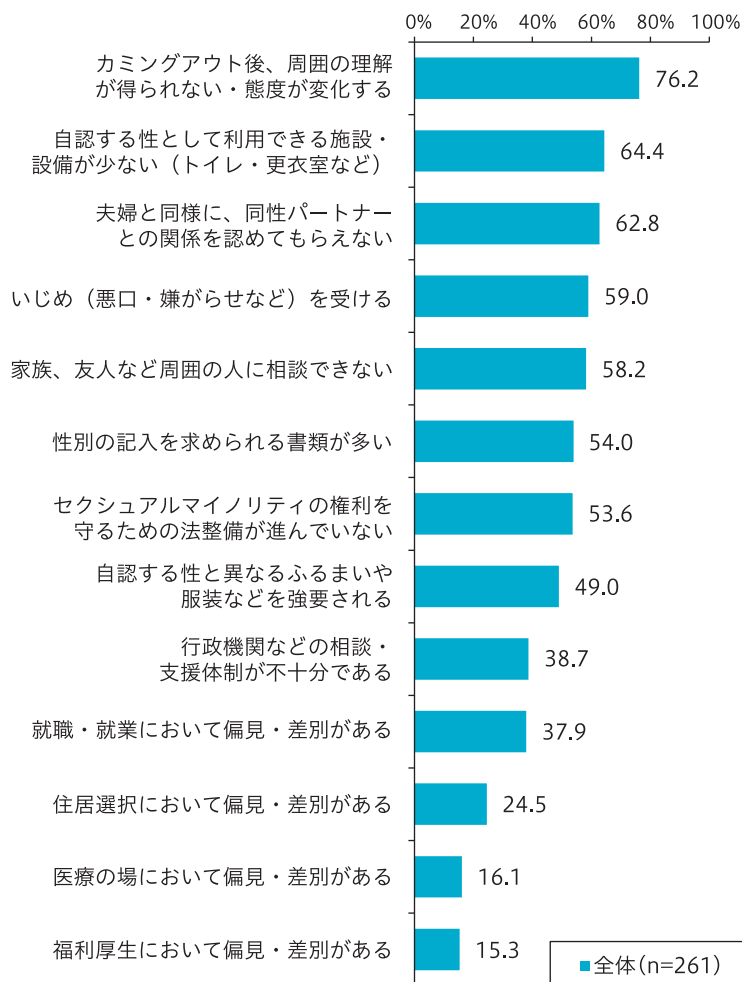


ほとんどの人がセクシュアルマイノリティにとって生活しづらい社会だと認識

セクシュアルマイノリティにとって生活しづらい社会だと思う人が約85%と高いのは、一般市民の10・20歳代と同様の傾向です。

また、セクシュアルマイノリティが生活しづらい社会である理由についての回答では、上位の2項目は一般市民と同じですが、「夫婦と同様に、同性パートナーとの関係を認めてもらえない」が3番目に高い点がやや異なっています。

図 セクシュアルマイノリティが生活しづらい社会である理由(主な回答)



- アンコンシャス・バイアス(無意識の思い込み)**

過去の経験や周りの環境などから、自分自身では気づかないうちに身についたものの見方やとらえ方の偏りのこと。誰もがもつものであるが、アンコンシャス・バイアスによる押しつけや決めつけがあると、相手を不快にさせたり、人間関係に悪影響を及ぼしたりする。性別に基づくアンコンシャス・バイアスは、就労の場や地域社会、学校現場、メディア、家庭等のあらゆる場面において無意識に男女の役割に対する固定的な価値観を与えることがある。
- 茨木市男女共同参画計画**

平成14(2002)年に策定(平成24(2012)年に第2次計画策定、平成29(2017)年に第2次計画改訂版策定)。男女共同参画社会基本法に基づき、男女共同参画社会の実現をめざして、本市の施策を総合的、計画的に推進することを目的とする。
- SDGs(エスディーゼーズ)**

平成27(2015)年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2030年までに持続可能でより良い世界をめざす国際目標。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓っている。5番目のゴール「ジェンダー平等の実現」は、目標のひとつであるだけでなく、すべての目標達成に不可欠という認識がもたれている。
- ジェンダー**

「社会的・文化的に形成された性別」のこと。生まれてからの生物学的性別(セックス/sex)とは別に、それぞれの社会や文化によって作り上げられた、「男性像・女性像」のような男女の別を示す概念。
- 女子差別撤廃条約**

昭和54(1979)年に国連総会において、日本を含む130カ国の賛成によって採択された条約。日本は国内法整備などを行い、昭和60(1985)年に批准した。
- 女性の職業生活における活躍の推進に関する法律(女性活躍推進法)**

働く場面で活躍したいという希望をもつすべての女性が、その個性と能力を十分に発揮できるよう、一定規模以上の企業等に女性の活躍推進に向けた取組を義務づけた法律。
- SOGI(ソジ)**

性的指向(好きになる性/Sexual Orientation)、性自認(心の性/Gender Identity)それぞれのアルファベットの頭文字をとった、すべての人の性のあり方を表す言葉。
- ダイバーシティ(多様性)**

性別、年齢、国籍、セクシュアリティ、障害などにおける「多様性」のこと。
- 男女共同参画社会**

誰もが互いにその人権を尊重しつつ喜びも責任も分かち合い、家庭・職場・学校・地域社会等のあらゆる分野において、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる社会。
- デートDV**

交際中のパートナー間における暴力のこと。相手を自分の思いどおりにコントロールしようとする態度や行動。
- ポジティブ・アクション(積極的改善措置)**

さまざまな分野において、活動に参画する機会の男女間の格差を改善するため、必要な範囲内において、男女のいずれか一方に対し、活動に参画する機会を積極的に提供するものであり、個々の状況に応じて実施していくもの。
- ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)**

働く人が「仕事」も「生活」(育児や介護、趣味、地域活動など)も充実させて豊かな人生を送ることをめざす働き方、生き方のこと。

茨木市男女共同参画に関する市民意識調査報告書 概要版

令和4年(2022年)3月 発行:茨木市 市民文化部 人権・男女共生課

〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号

TEL:072-620-1640 FAX:072-620-1725

Eメール:jinken@city.ibaraki.lg.jp